

二〇二二年三月一八日

トンネルを抜けでし吾に初音かな  
島々を影絵に瀬戸の春満月  
腕白も目を潤ませて卒業す  
あたたかや埒にもたれて馬定め  
やはらかき雲春嶺に触れゆけり  
音程を涙に外す卒業子

二〇二二年三月一七日

河馬の仔の初見参や水温む  
退院は夫の新車で風光る  
春光を撥ねて疾駆す競べ馬  
芽柳に撫でられてをるお濠端  
水温む水琴窟は賑やかし  
囀りへ向けて留め置く乳母車  
買はざりし的中馬券春の夢

二〇二二年三月一六日

茶会終へしづかな春の炉となりぬ  
山笑ふ仰向けとなり猫眠る  
解体の船引かれゆく沖霞  
銀輪の力士の袷膨らみて  
朝より夕べ賑はふ花こぶし  
気のすまぬ時そつぽ向く春の駒  
桜餅商ひ継ぎて三百年

二〇二二年三月一五日

白魚の夕日に透くるいのちかな  
一湾の縮緬波に風光る

こずもす

素 秀

満 天

もとこ

ひのと

智恵子

凡 士

なつき

うつき

凡 士

もとこ

ひのと

はく子

ひのと

宏 虎

ひのと

あひる

せつ子

董 雨

む べ

ひのと

せいじ

嬉しきは新メンバーと初桜

二〇二二年三月一四日

春禽の翔ちてひろがる水の綺羅  
水温むあまた画架立つ中之島  
ランドセル背負つたまんま春の野へ  
引き波に砂礫が奏づ春の楽  
一斉に祈る手のごと白木蓮  
老いうららひねもす畑の草引いて  
海昏れて舟屋にほのと春灯

二〇二二年三月一三日

Vの字の伸び縮みしつ雁帰る  
蹴り返すボールにお礼あたたかし  
のどけしや地蔵と並ぶ見守り隊  
童画展原色ばかり暖かし  
溪谷の蒼き底より雉子の声  
遠近に釣人の居て波止の春  
春うらら洗濯物にかくれんぼ

二〇二二年三月一二日

春風にあち見こち見す風速計  
春光をリレーするごと波たたむ

たか子

あひる

凡 士

ひのと

せいじ

む べ

千 鶴

凡 士

宏 虎

たか子

素 秀

たか子

素 秀

きよえ

ふさこ

たか子

せいじ

毎日句会みのる選・二〇二二年三月二〇日